



龍族

RYUZOKU

第 12 号

南天会
平成 30 年
4 月 1 日

ササイ竜王の鉄塔、三本の柱

富士玄峰



アンベードカル博士のこと、
佐々井秀嶺上人のことが、ようや
く日本のマスメディアに取り上げ
られるようになって参りました。

これは作家・山際素男先生の精
力的なお仕事の功績が多大であり
ます。また、山本宗補氏や小林三
旅氏等の果敢な取材の功績でもあ
りますし、南天会会員のご努力の
成果でもあります。

ようやく 2017 年 10 月の NH
K 『こころの時代』で、帰国中の
佐々井上人へのインタビューが放
送されました。『こころの時代』
への登場は、ようやく正當に上人
の活動を評価しようという方向へ
流れが変わったと言えましよう。

ところで、2013 年 11 月 9 日
付「中外日報」に一つの書評が載
りました。

佐藤良純著『ブツダガヤ大菩提
寺―新石器時代から現代まで―』
を、奈良康明駒沢大名誉教授が評
したものです。なるほど評者の言
うとおり、近現代の政治的動向と
考古学的成果を収める“内容でし
た。

ただ一点、非常に残念に思うこ
とがありました。

最終章の「ブツダガヤ寺院法の
制定から現在まで」において、そ
の寺院法の変遷に触れ、2009
年の管理委員会のメンバー構成を
載せているのです。

議長：S・K・Singh

住職：Chalinda 比丘

委員：Nangzey・Dorjee

N・S・Sasai

Sudarshan・Giri マハンタ

Gyaneshwar 長老比丘

M・Maharathi

K・Verma

R・Misra

A・K・Singh

諮問委員に日本大使を含む
25 名が任命されている。

ばこそ、残念な一点は、著者も
評者もなぜ、N・S・Sasaiこそイ
ンド国籍を取得しインド仏教徒を
指導している佐々井秀嶺上人その
人であると、付言されなかったの
か？ N・S・Sasai が佐々井上人
であることは百も承知なのであ
る。誠に残念なことでした。しか
し、今やそうした空気は打ち破ら
れつつあります。今後、大きく変
わって行くでしょう。

佐々井上人がササイ竜王として
打ち立てておられる鉄塔は三本の
柱から成っていると考えておりま
す。

- 1、アンベードカル博士の後を継
ぎ、インド仏教最高指導者（最高
齢のインド比丘でもある）として、
日常の教化と共に改宗広場での重
要行事の導師を務めておられる。
- 2、釈尊成道の聖地、ブツダガヤ
大菩提寺の管理権を完全に仏教徒
の手に取り戻すための活動。粘り
強く裁判闘争を続けておられる。
- 3、マンサールやシルプールの仏
教遺跡発掘事業。ますます大きな
規模となっている。

（神戸 明泉寺前住職

南天会賛同人）

この記述は日本の仏教界にブツ
ダガヤ大塔の管理の現状を知らし
める大変貴重なものです。であれ

第25回 ドンガルカル国際仏教徒大会

2018年2月にインド・ドンガルカルで開催された仏教の国際的なイベントに、佐々井秀嶺上人とともに南天会も参加しました。

第25回ドンガルカル国際仏教徒大会におけるスピーチ

京都産業大学 志賀浄邦

ジャイ・ビーム！

私は志賀浄邦という者です。私は日本から来ました。拙いヒンディー語ではありませんが、今回はヒンディー語でお話させていただけようと思います。よろしいでしょうか？ 私は大阪にほど近い京都というところに住んでいて、京都産業大学という大学で教員をしております。そこで私は仏教文化やインド思想といった授業を担当しております。本日は、ドンガルカルでのこのような記念すべき大会に参加させていただくことができ、大変光栄に思います。ドンガルカルに来たのは、今回が初めてです。今回このような記念すべき大会でスピーチをさせていただく機会を与えていただいた、アーリヤ・ナーガールジュナ・佐々井秀嶺師に心より感謝申し上げます。

私は今、これほどたくさんの人々がインド各地からこのドンガルカルの地に集まり、この大会に参加していることをとても興奮した気持ちで拝見しております。そして今まさに仏教がインドにおいて、大きなうねりの中で勢いよく「復活」しつつあることを実感しております。また、皆さん方仏教徒の間に、大いなるエネルギーと、大いなる熱意と、大いなる勇気と、大いなる希望と、大いなる未来を感じました。また同じ仏教徒として、皆さん方との一体感を感じております。



さてこれからアンベードカル博士についてお話ししたいと思います。実は、私は日本において研究者仲間とともに「B. R. アンベードカル及びエンゲイジドブツダイズム研究会」を立ち上げ、アンベードカル博士の思想および実践と社会に関わる仏教について研究しています。

アンベードカル博士はヒューマン・ライツ（人権）の闘士であるだけではなく、偉大な学者であり、偉大な哲学者であり、偉大な政治家であり、また言うまでもなくインド共和国憲法の中心的起草者であり、インド憲法の父です。彼は自身の人生において、全てのエネルギーを社会的に恵まれない人々のために捧げました。「自由」と「平等」のための戦いにおいて、アンベードカル博士は、暴力にも武器にも頼りませんでした。彼は銃の代わりにペンを取り、その力と言説を自身のペンに込めました。そして剣の代わりに、闇を切り裂く智慧の光を用いました。アンベードカル博士の心強い信奉者たちは、彼に味方する強力な軍隊となりました。彼は、インド共和国憲法を起草したことと仏教の復活を宣言したことによって、インドに革命的な変化をもたらしたのです。

このようにアンベードカル博士はその65年の人生の中で、偉大な功績を残しました。しかしながら残念なことに、私たちが住んでいる国日本では、アンベードカル博士の名前はそれほど有名ではありません。日本の人々の多くはマハトマ・ガンディーやマザー・テレサの名前は知っていますが、アンベードカル博士を知る人は少ないのです。私は、アンベードカル博士の名前と功績は日本においてはもちろん、より広く世界においても知られるべきであると思います。そして私は日本の人々に、仏教が今、ブツダの母国インドにおいて復活しつつあることを知らせたいと思っています。そしてこの仏教の復興は、すべてアンベードカル博士とアーリヤ・ナーガールジュナ・佐々井秀嶺師のおかげです。

アンベードカル博士の仏教は常に前を見えています。決して後ろは振り返りません。ブツダのダンマは未来を見ずえており、過去のことには拘泥しません。アン

アンベードカル博士が数ある宗教の中から仏教を選んだのは、ブツダのダンマ（仏法）が「智慧（プラジュニヤ）」と「慈悲（カルナー）」と「平等（サマター）」



ベードカル博士は生き方のみならず、社会変革の必要性も教えてくれました。アンベードカル博士によると、「涅槃（ニッバーナ）」あるいは「解脱」は死後に実現されるものではなく、現在の生において実現されるべきものです。彼は、個人の「涅槃」のみならず、社会の「涅槃」が実現されるべきであると説きました。ブッダもまた、まさしくこの生、この世界において「涅槃」を実現すべきことを強調しています。「苦からの解放」とは、今この生において達成可能なものなので

す。またアンベードカル博士は、どのようにすれば社会に変革をもたらすことができるのか、どのようにすれば私たちの住む社会において差別や偏見や苦悩をなくしていきけるのかについても教えてくれました。彼は有名なスローガンにおいて以下のように述べています。「教育せよ！ 闘争せよ！ 連帯せよ！」と。誰を教育すればよいのでしょうか？ 自分子どもたちを教育し、お互いに教えあいましょう。何のために闘えばよいのでしょうか？ 私たちは社会の変革のために闘うのです。自分を尊ぶ心と人間の尊厳のために闘うのです。どのように連帯すればよいのでしょうか？ 私たちは、平和で慈しみにあふれた仏教共同体を築いていくのです。そこでは、共同体のすべてのメンバーが互いに尊重され、共に生き、共に笑い、共に泣き、共に助け合い、共に学び合い、喜びも悲しみも共有するのです。その時、そこには真に「平等な」社会が実現していることでしょう。

またアンベードカル博士は言っています。私たちは仏教者として自分自身を苦から解放していくだけではなく、自国の発展と世界の平和のためにも力を尽くさなければなりません、と。ブッダとアンベードカル博士の智慧と慈悲の光が、ドンガルガルから全世界へ行きわたりますように。そして、皆さま方に世尊ブッダによるご加護と祝福がありますように。ナモー・ブッダ、ジャイ・ビーム、ジャイ・バーラト。ご清聴ありがとうございます。

インド幻想行

長谷川 敬二

遂にインドの地を踏んだ。

二十代の頃より思いあこがれてきた、インドに遂に来た。

私の人生最初の外国経験は、二十代の頃のロシア（旧ソ連）だった。新潟よりハバロフスクまでの旅客機の行程の後、降り立った空港での第一印象は「ああ、日本の空気と同じだ」だった。

当たり前のことかも知れないが、世界のどこへ行っても、呼吸する空気は同じだという発見は、この後の外国旅行でも実感し続けた。

支那、英国、仏国でも同じだった。世界の人間は皆、日本人と同様の空気を吸って生きている。この真理が、どれほど自らの世界観、歴史観の確立に影響を与えたか。風土の差異なるもの以上の共通項に括られて、人間は世界に広く安住しているものらしい、と。さて、ユーラシア大陸でまだ自ら土を踏んでいない場所があった。インドである。

インドには若いころから、えも言ひ得ぬ感情を持ち続けていた。宗教、特に仏教に心を奪われていたあの十代、私の過去が仏教と関連性があると悟ったあの



二十代、ヨガに打ち込んでいた三十代、インド映画に心奪われ、最も美しい女優「スリデヴィ」にあこがれていた四十代。そのころから漠然とインドの土を踏みたいという気持ちは募っていった。

そして、インドと日本の、神話を通じての縁をもとに小説を書き始めた今現在も。

しかし、何故かインド行きの縁がどうしても生じなかった。

故三島由紀夫は言っている。縁と業の結びつきによって、いかほどインドに行きたいと思っても、その人の行く時期は定まっているものだ、と。それほどインドと業との結びつきは深い。残念ながら、私は自らの業により、若



い時期にインドの土は踏めなかったものらしい。

七十歳を過ぎた今、ようやくこうしてインドの土を踏みしめることができた。それはほとんどあつけないくらいに。

しかし、業生深き私には、いろんな差し障りが行く前からも、インドに着いてからも、身辺に生じていた。不思議なくらいにそれらは、現れては消えていった。ここにそれをこまごま記すのはやめよう。

今、成田発の旅客機はデリーに向かつて飛んでいる。エア・インディアに乗るのは無論初めてだ。デリーでの入国手続きは時間がかかった。

インドに着いた。送迎バスの窓から見るデリーの夜景にしばし見惚れていた。

昔のことである。職場の同僚たちと談笑していたら、インドの話になった。同僚の一人が「インドは仏教の国だから、もう少し優しいやりかたをしないと…」などと口走った。私がすかさず「インドはヒンズー教ですよ」と口を挟むと、その同僚は目を白黒させながら「でもお釈迦さんはインドの生まれだろう?」

「正確に言えば、ネパールです。」

その同僚がその後、何をしゃべったのか記憶にない。だが一つ気づいたのは日本人の宗教的無知の、一つの平均値がここに露呈されていたということだ。

その同僚のように、お釈迦様はインドで生まれたから、当然インドは仏教国だと単純に思い込む手合いが大部分だったのが当時の日本である。

あの日から数十年経ち、今インドに私はいる。

デリーからライプルーへ飛行機で飛ぶ。ライプルーでは、インドをまさしく仏教の国にしようと奮闘されている、佐々井秀嶺上人が眼前にいらした。ついに上人に出会えた。

上人自ら私に花輪を掛けていただいて、はなはだ恐縮の態だった。

翌二月六日、ドンガルカル国際仏教徒大会に参列。会場に集まった数千の聴衆のほとんどが仏教徒だった。会場を飛びまくっていたドローンのように、気は宙を飛んでいた。

三日後ラジギールの早朝、霊鷲山に登る。

何という感激だ。あの釈尊が法華経を説かれたという霊鷲山に実際来て私は合掌している。私を含めて六名の少人数ながら、皆等しく山上で日の出を拝んだ。

翌日は釈尊成道の地、ブッダガヤ参拝。大菩提寺で世界の仏教徒の渦に遭遇する。はなはだ壯観。スジャータホテルで朝食でいただいた乳粥に、釈尊の成道への思いを推し量った。

二月十一日、バラナシでガンジス河のヒンズー教徒の沐浴風景、小型船でガンジス河遊弋を経験。日の出がまた霊鷲山の時のように見事だった。

二月十二日千葉成田空港着。一気に冬の寒さが襲ってくる。

空港で別れを惜しんで解団。同日夕刻、郷里福岡に舞い戻った。

それから十数日して、テレビで米国アカデミー賞授与式を見ていて、インドの代表的女優「スリデヴィ」の死去を知った。五十四歳だった。

佐々井上人とスリデヴィ。一つの出会いと一つの別れ。やはり私は業の深い男であった。

あのインド旅行は、幻想であったかもしれないとふと思ったりした。

インド滞在記

寄稿

古永尚子

私は、昨年の11月末から約20日間、ナグプールの佐々井秀嶺師(以下、インドと呼んでいたようにバンテージと言わせていただきます)の元でお世話になりました。

簡単に自己紹介をさせていただきますと、私は関西在住の、バンテージ曰く「悩みを抱える典型的な日本の若い人」です。バンテージの事は、「B. R. アンバー ドカル及びエンゲイジド・ブッディズム研究会」の代表である関根康正先生を通じて知り、昨年の6月の四谷真成院でのバンテージの法話で初めてお会いしました。そこで私はバンテージの迫力に圧倒され驚き、人柄や考えに強く惹かれました。

それから約半年後、幸運にもナグプールでバンテージにお会いすることができました。実は、インドへはバンテージにお会いする為に行ったわけではなかったのですが、様々な人との出会い、親切により、ナグプール、そしてインドーラ寺

にたどり着くことができました。バンテージは突然の来訪にもいやな顔ひとつせず、所有するゲストハウスに滞在するよう勧めて下さいました。その言葉に甘え、私はそこでお世話になるようになったのです。

バンテージは私を大改宗広場やマンセル遺跡、養老院からシユラバステイなど、「お前に根性つけてやる」と言いながら、色んな場所に連れて行って下さり、私に「使命」を与えようと心を尽くして下さいました。

特に印象に残っているのはバンテージの知り合いの方のお葬式に行った時の事です。バンテージはそこで「この世は一瞬の夢だ」「無常だ」と言われました。その無常を私は感じる事ができませんでした。ただ、なぜだかそこで「生かされている」と感じました。「生かされている」と感じる故人の灰が漂う中で、それを強く感じました。「私は私であり私ではない」とバンテージと過ごすことにより



感じました。

また、片道約 26 時間、車に揺られ行ったシユラバステイもとても印象に残っています。シユラバステイでは、世界的に有名な Bangkok Sittihopoi さんという在家信徒の方が建てられた、まるで桃源郷のような仏教施設に連れて行っていただきました。そこでは多くのタイ人女性在家信徒の方が修行をされていて、私はその方々から仏陀の教えについて様々な事を教えていただき、またこの上なく親切にしてください、まるで夢の中にいるようでした。

しかし、一番印象深いのは帰りの車中のバンテージの言葉です。「あそこは女の在家信徒の人がたくさんいるから前が元気になるかと思っただけです。バンテージはそうおっしゃったのです。私はその大きな優しさ、心からの優しさに言葉では表現できない気持ちになりました。シンプルな混じりけのない優しさを私事ですが、私の永年の疑問は人間の優しさについてでした。そして優しくなれない自分がどうすれば優しい人間になれるのかということでした。バンテージのそばにいて、その答えがわかったわけでは決してありませんが、その無垢な優しさに私は驚き、どうしようもない気持ちになりました。

ナグプールでバンテージのおそばにいられたことは私にとってこの上なく幸運

なことでした。バンテージはやはり偉大な師でした。しかし、私にとっては田舎のじいちゃんでもありました。人間らしい人間でした。バンテージは私がナグプールを出る時、駅で 2 時間遅れの列車と一緒に待つて下さり、駅に売っているバナナとミカンを持たせてくれました。そして、あの優しい笑顔で見送って下さいました。私はまた近いうちにインドへ行く予定です。

インド現地報告

亀井竜亀

(Facebook『佐々井秀彌資料室』より)

2017年12月1日

昨日は日本からのお客さまをナグプール市内へご案内。バンテージのご案内で普段入れないような場所や聞けない話を沢山して頂きました。

今日はマンセル遺跡、龍樹菩薩大寺、老人ホームなどご案内。日本から来られたお客さまに加え、改宗記念広場で偶然出会われた日本人やバンテージに会



いに来られた女性も加わり大変賑やかなツアーとなりました。その後、バンテージは慌ただしくオーランガバード、ムンバイでの仏教改宗式典に出発。

12月2日

列車で 13 時間かけてオーランガバードに到着。タイ国から仏像が贈られお祝いの仏教徒大会が開催されています。バンテージ「みなさん！ ジャイビーム！ もっと大きな声で！ ジャイビーム！ ジャイビーム！」

12月3日

オーランガバードから列車で 6 時間かけ、ムンバイの玄関都市カリヤンに朝 4 時に到着。ホテルで少し休憩し仏教改宗式典、パレードに参加。バンテージは 1000 名ほどの改宗式の導師を務められました。また式典にはナグプールから





アンベードカル博士の舍利を持参。

式典終了後、夜11時発の列車に飛び乗り、翌日の午後2時にナグプールへ到着しました。

12月6日

アンベードカル博士が亡くなられた日。インド全土で博士を偲ぶ会が催されました。

12月10〜13日

北インドのシユラバスティへ。ナグプールから車で片道26時間かかりました。ここは佛様が長く滞在した祇園精舎跡があることでも有名です。今回の目的は写真後方にうつすらと写っている黄金のストウーパ、仏像を建設したタイ国のウパシカ、Bongkot Sittipol さんにお会いすることでした。300名ほどの方がここで生



活リストウーパ、仏像もすべて自分たちの手で建設したそうです。(ウパシカニ僧ではないが佛の教えに従い修行している女性のこと)

12月18日

日本から2組のお客さんがバンテージを訪ねて来られています。関西学院大学卒業生の古永さん。広島県の尾道市から竹本ファミリー。

12月21日

30kgのお米が16袋、バンテージが運営する畑でとれました。このお米で老人ホーム、ゲストハウスの食糧を賄います。

12月22日

シルプールで行われる世界仏教徒大会へ出発！ チームバンテージ、3台の車に33名！

12月23・24日

シルプールで行われた国際仏教徒大会へ出席。インド全土から総勢500名余りの僧侶が集まりました。

12月25日

午前、アンベードカル博士著書『ブツダとそのダンマ』知識確認試験。インドラ寺近くの広場に8000名程の人達が集まり試験を受けました。午後からバンテージは改宗記念広場にてOB C組織の改宗式導師をつとめられました。

12月31日

必生。
今年も残すところ数時間、インドは午後7時です。バンテージは年末年始に関係なく、明日プネーで行われる改宗式典へ出席の為、



車で移動中です。年越しは車の中で迎えます。

2018年1月1日

バンテージはプネーにおいて改宗式導師を務められました。この日、プネーを中心にアンベードカル支持者や仏教徒のバスや車がヒンドゥー至上主義者によって襲撃される事件が起きました。50台以上の車が襲われ破壊されたそうです。バンテージは無事に式典を終えてナグプールへ帰ってきましたが、この騒動がマハラシュトラ州全体に広まっているようです。

1月7日

まだまだインドでは暴動が収束していませんが、マンセルにある文殊師利菩薩大寺では仏像の塗装作業を進めています。お坊さん3名と塗装工3名、途中から迷子になった子犬も加わり、空太と名付けられみんなから可愛がられています。

1月26日

インド共和国記念日。インドで最も重要な国家の祝日である共和国憲法発布記念日。

インド憲法の父「アンベードカル博士」
1947年8月15日にインドが独立を果たすと初代法務大臣に就任し、憲法起草委員の一人としてインド憲法の制定に

中心的に関わる。草案には信教の自由や封建遺制の禁止などが明記されると共に、被差別カーストに対する現状を、歴史的経緯や社会環境に鑑みただ上では正するための改善措置も規定されていた。

バンテージもインド国旗をもってアンベードカル博士ゆかりの場所で法要を行いました。

1月28日

本日は、タイ国から贈られた仏像の御披露目式が龍樹菩薩大寺で行われました。

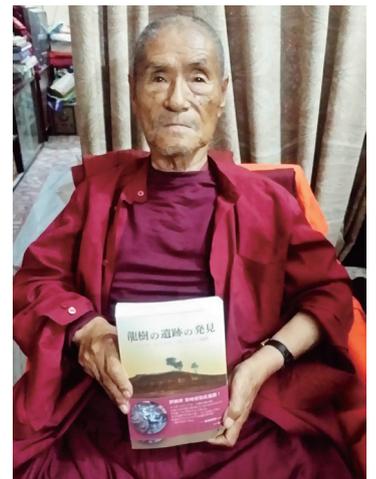


2月2日

バンテージのお手元に中村龍海氏翻訳の『龍樹の遺跡の発見』が届きました！バンテージも早速読み込んでいます。

南天会特別価格 4320 円 (税込)

nantenkai@gmail.com まで



2月5日

南天会主催ツアーのお客様が日本からライプルー空港へ到着されました！これからシルプール遺跡をご案内します。シルプール遺跡、ササイブツダビハール、また新しくシルプールにできたナーガルジュナメデイーションセンターを訪問しました。

2月6日



2月7日

ドンガルカル世界仏教徒大会。市内からブラジュニヤギリまで行進し、黄金の大仏の下で様々なプログラムが行われました。日本からの南天会ツアー参加者も参列し、京都産業大学の志賀浄邦先生がヒンディー語でスピーチし、ツアー参加者の土岐信子さんが詩吟や踊りを披露しました。

2月13日

南天会ツアーとマンセル・ラームテヘ。南天会から支援金が贈呈されました。この日は龍樹大祭の日でした。毎年ヒンズー教のシヴァの槍を龍樹山に奉納することを止めさせる抗議活動を行っています。バンテージ「三世諸仏の御加護により無事に龍樹山を守ることができ

2月25日

きました。昨年は350人、今年は警察官400人体制で龍樹山を取り囲み、入り口にバリケードを設けてヒンズー教徒が槍を持って登れないように、また衝突が起きないように警護して頂きました。仏教徒民衆はトラックやバスで3、4千人駆けつけてくれ抗議活動は大成功であったと言ってくれました。」

3月4日

バンテージは改宗式広場で行われているブツダフェスティバル閉会式に列されました。デリーで改宗式典の導師をつとめられました。1000名ほどの参加者がありました。





ブツダガヤ大菩提寺 管理権返還運動

ブツダが菩提樹下に座してさとりをひらかれた仏跡第一の聖地ブツダガヤ。その金剛宝座にそびえ立つ大菩提寺は2002年ユネスコの世界遺産に登録されています。しかしこの全世界の仏教徒の聖蹟は、18世紀初めごろより現地のヒンドゥー教バラモンの管理下となり、その後スリランカ、タイ、日本の仏教徒の働きかけもありましたが、現在もなおヒンドゥー教徒主体の管理法が適用され、治安や寄付金管理などで多くの問題を抱えています。

佐々井上人はこの状況を目にして、1992年からナグプールの仏教徒と共に大菩提寺の返還運動を行って来ましたが、首都デリーやブツダガヤに向けてのデモ行進や断食などの運動は十数次にも及び、インド政府大統領やビハール州首相に陳情書を提出し、国連のアナン事務総長(当

時)に書簡を送り、パリのユネスコ本部を訪れてこの問題の国際的な関心を提起しました。

1949年ビハール州制定のブツダガヤ大菩提寺管理法では、ヒンドゥー教徒4名、仏教徒4名とビハール州ガヤ地区長官(ヒンドゥー教徒)の9名が管理委員を構成することが決められており、実質はブツダガヤ地区の地主であるバラモンのマハンタ一族がその実権を有しています。現在佐々井上人は、このブツダガヤ大菩提寺管理法の無効を訴える裁判を係争中です(1950年施行のインド憲法で、それ以前の法律の無効が宣言されています)。

この裁判は、佐々井上人本人が原告となり、自費で弁護士を雇って続けられています。

2017年5月、アンベードカル博士生誕祭でナグプールを訪れたナレンドラ・モディ首相に、佐々井上人は大菩提寺の現状を訴えました。また7月に就任したラーム・ナート・コウヴィンド大統領は、ダリット出身のもとビハール州首相で、9月30日のナグプール改宗記念式典に出席しました。佐々井上人とインド仏教徒による様々な働きかけにより、大菩提寺管理権返還は実現されようとしています。

この運動には国際的な援助も行われています。タイ、スリランカ、チベット、台湾などの仏教国からも支援者がナグプールを訪れています。日本の伝統宗派では、臨済宗各本山・黄檗宗が共同で声明文を発表しています(後掲資料参照)。

しかし多くの日本の宗派や研究者は、25年以上にわたる佐々井上人やナグプールの仏教徒の運動に対して関心が薄く、意図的な排除が感じられる論文や報道も見受けられます。これまで決してあきらめることなく不断の努力でこの運動を継続してきた佐々井上人は、インド現地にあつてその当事者である仏教徒に親しく接し、その裁判資料やユネスコへの提出資料など膨大なリサーチを行い、自ら何の報酬を得ることもなく83歳の現在もおその先頭を歩き続けておられます。

【資料】
臨済宗・黄檗宗連合各派合議所アピール
全世界の仏教徒の根本一大聖地はいまでもなく、貴国ビハール州、ブツダガヤの大菩提寺であり、金剛宝座と菩提樹に象徴されます大塔とその一帯こそ、世界仏教徒の信仰の拠り所となる聖なる場所であります。

ことに私も臨済の流れを汲むものにとりましては、とりわけ仏心宗と標榜するように、積尊よりマハー・カーシヤパ尊者に付属され、ボディー・ダンマ大師、慧能大鑑禪師、臨済義玄禪師と的々相承し、日本において臨済宗・黄檗宗十五派と華ひらいております。

大菩提寺管理権返還は、世界仏教徒がその根本聖地を取り戻し、ブツダガヤを中心にして世界の仏教徒が結集し、人類に平和と共生を提言する仏教の未来に大きな貢献となるでしょう。またアンベードカル博士により復興を遂げつつあるインド仏教徒にとつては、自らの宗教の歴史的な拠点の獲得という重要な課題です。南天会では、佐々井上人を通して裁判費用などの支援を展開し、また日本国内でのこの問題の周知、世論喚起に努めてまいります。ご支援のほどよろしくお願い申し上げます。

今日、貴国においても、一九五六年十月十四日、マハラシュトラ州、ナグプールに置いて、独立インド憲政の父であります、アンベードカル博士によって導かれ、仏教が復活したことはすでに皆様よくご承知のとおりであります。

その後継者として日本人僧、インド国籍名アーリヤ・ナーガルジュナ佐々井秀嶺師が一億人とも言われるインド仏教徒を指導して来られ、現在は中央政府の要職であるマイノリティー委員会の仏教徒代表委員に就任しております。

その佐々井師が十数年前より、身命を投げ打って、大塔の管理権の返還を訴え続けておられる様子は、日本のマスコミでも大きく報道され、仏教界、一般国民に大きな感動を呼んでおります。

日本国民の大多数は仏教徒であります。私どもが願うところは、ユネスコによって正式に世界遺産に認定されようとしているブツダガヤの地が、世界宗教の一つである仏教の根本聖地として名実共に、仏教徒の手によって管理運営され、その尊厳と静寂が護られ、巡礼者にとつて真の心の安らぎを得られる清浄地となることとであります。

この聖地の問題に一層のご理解とご支援をいただきまして、どうか一日も早くブツダガヤ大塔、大菩提寺がすべてインド仏教徒の手に委ねられ、安心して仏蹟巡拝ができるようになりますように。こ

れこそ日本・印度両国の固い友情、真の友好の証といえるでしょう。

この実現のために、閣下の御尽力を是非ともお願いいたしたく、日本禅宗、臨黄十五派の連名をもってこの一文を提出するものであります。

平成十七年五月二十三日

臨済宗・黄檗宗連合各派合議所

臨済宗妙心寺派宗務総長
黄檗宗宗務総長

臨済宗南禅寺派宗務総長

臨済宗建長寺派宗務総長

臨済宗東福寺派宗務総長

臨済宗円覚寺派宗務総長

臨済宗大徳寺派宗務総長

臨済宗方広寺派宗務総長

臨済宗永源寺派宗務総長

臨済宗天龍寺派宗務総長

臨済宗相国寺派宗務総長

臨済宗建仁寺派宗務総長

臨済宗向嶽寺派宗務総長

臨済宗佛通寺派宗務総長

臨済宗国泰寺派宗務総長

アブドウル・カラム大統領閣下

マンモハン・シン首相閣下

ブッタ・シン、ビハール州総督閣下

ポスト・アンベードカルの民族誌



本

ポストアンベードカルの民族誌
根本達 現代インドの仏教徒と不可触民解放運動

根本達 著
法蔵館 364頁
定価 5000円 (税別)



新刊
2018年3月

ドの仏教徒たちと、不可触民の解放に取り組む反差別運動をめぐる人類学的研究である。このポスト・アンベードカルの時代において、不可触民解放運動は、進むべき明確な道を見出せないまま、もがき苦しみながら前に進み、元不可触民の人格は「怒り」や「暴力」といった言葉で表現されてきた。

2001年から2016年までの間に合計2年の現地調査を実施した筆者は、同一性の政治学（アイデンティティ・ポリティクス）の特徴を持つ不可触民解放運動に加え、仏教徒たちの生活世界から立ち上がる寛容の論理に目を向ける。ここでは活動家、仏教僧、在家信者、「半仏教徒・半ヒンドゥー教徒」、「改宗キリスト教徒」、仏教僧佐々井秀嶺（1935—）の視点と実践がボトムアップから論じられ、在家信者が活動家となる動態性や、仏教への改宗後もヒンドゥー教への信仰を捨てきれない輻輳性が明らかになる。

「B. R. アンベードカル及びエンゲイジト・ブツデイズム研究会」メンバーの根本達氏が単著『ポスト・アンベードカルの民族誌―現代インドの仏教徒と不可触民解放運動』を法蔵館から出版しました。2001年から2016年までの間にナグプル市で計2年間実施された現地調査に基づくものです。全364頁で、写真も50点ほど掲載されています。ご関心のある方は書店にてお買い求め下さい。

1956年10月14日、「不可触民の父」と呼ばれるB. R. アンベードカル（1891-1956）は、30万人以上の元不可触民を率い、インドのナグプル市でヒンドゥー教から仏教へ集団改宗した。本書は、集団改宗とアンベードカルの死去から半世紀が経過した現代イン

同一性の政治学は、元不可触民に自己尊厳を与え、反差別運動に取り組むアンベードカライトを数多く産出してきた。これらのアンベードカライトは、アンベードカルが示す「自由・平等・博愛の仏教」をインドに広め、公正な社会を実現することを目指している。同時に、ヒンドゥー教を「差別と迷信の宗教」、仏教を「平等と科学の宗教」と定義し、排

他的な当事者に依拠するアンベードカルの教えは、他宗教信者との間で暴力的な対立を発生させている。これに加え、活動家が「半仏教徒・半ヒンドゥー教徒」や「改宗キリスト教徒」の家から他宗教の神々の像を回収・焼却することで、被差別者の中の被差別者が創り出される。そこでは活動家自身もまた、「差別に抗する団結か、家族との愛情か」という二者択一のジレンマに直面している。

グローバルゼーションがもたらす流動化と不確実性の中、反差別運動の論理に反する生活世界の他者の声を聴く（聴か

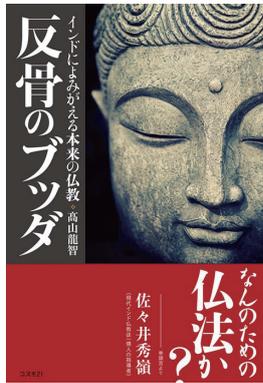
反骨のブツダ

—インドよみがえる本来の仏教

高山龍智 著

コスモ21 152頁

定価 1400円 (税別)



新刊
2018年1月

巻頭言佐々井上人寄稿。書店にて発売中。南天会事務局にも在庫がございます。

「デーヴァダッタ（提婆達多）の考え方のほうがインドの常識に近いんだよ」ヒンドゥー教徒の友人が言った。

ない）ことは、仏教徒たちの不可触民解放運動にどのような展開をもたらしているのだろうか。本書では、複数化や動態性を特徴とする生活世界の寛容の論理が、閉鎖性や排他性にかかわる同一性の政治学の中に入り込み、それとは別の運動を生み出していることを議論する。より具体的には、「半仏教徒・半ヒンドゥー教徒」がブリコラージュを用い、等質性なきものが協働する連帯を創出し、佐々井が生成変化の政治学を通じて、不可触民解放運動の当事者性を拡張することを考察している。（B R A研究会Facebookより）

仏教にも詳しく、日本留学経験もある彼が云うには、ヴェーダを尊びカーストを重んじ戒律の厳格化と苦行を奨励したデーヴァダッタは伝統的なインドの価値観に準じており、人間平等と無常・苦・無我を説いたブツダのほうが、「レジスタンス的だったんだよ」

じつは、数年前に交わしたこの会話が、拙著『反骨のブツダ』執筆動機の一つになっている。彼の示した視点に立てば、ブツダ滅後のインドで仏教がどんどん（ブツダから遠くなくなっていった）経緯の背景に横たわるものの輪郭が、臍氣ながら見えてくるように思えたのだ。そして、仏教滅亡の歴史を再考することは、寺院の消滅すら語られる今日の日本を考える上でも重要なことだと思えた。

また、あまたの仏典において「豪も白法なき諸悪の首」とされる大悪人…提婆達多が、仏教の故国インドのヒンドゥー教においてはむしろ常識人とも見なされ得ること、そのデーヴァダッタ（調達とも音写）を日本の親鸞が、「浄邦縁熟して調達、閻世をして逆害を興ぜしむ（『教行信証』総序）」「提婆尊者（『浄土和讃』）」と称えたことに、ありきたりな「教祖伝の悪役」で片付けてはならない人間デーヴァダッタ……例えば映画『沈黙—サイレンス』のキチジローのような……を感じていた。

あえて口はばつたい言い方をすれば、仏教徒各人がそれぞれに、（みずからの内なるデーヴァダッタ）を見失った時、仏教は滅亡に向かって滑り落ち始めるのではないだろうか。

（高山師ブログ『J'やん Day』より転載）

『反骨のブツダ』を読んで

宮本光研

高山龍智著『反骨のブツダ』は画期的なものがある。その「無常・苦・無我」はつねの知を凌駕しているというか。

無常とはアニテイヤ——常なるものは無い、という解であるが、日本人われわれは「秋となれば木の葉が枯れ、やがて散っていく。人も若々しくても、そのうち老いて死ぬ。」ブツダの無常はどんな人間に生まれようとも、常と決まってい

るわけではないから、どんな人生を生きようとも自由である。カーストからのくびきを脱かれた解放の思想。常と決まらずにあるか？「いろは句えど常ならず」である。人間はほとんどん変っていく。あわよくばホトケになることさえできる。全き自由、解放のおしえである。

私は寡聞にして、こうした仏教を説いた書を読んだことがない。あるかも知れないけれど、無常はイメージとしては違った。カースト打破であるとは知らされなかった。

また「苦」は樂をするものがあるから苦がある。これもカーストの現状打破を主張する。四法印の一つ「一切皆苦」とはちがう。

さらに「無我」は、とられる我などないにしくはない、というか。我にとられるなかれ。しかるに我、自、自己を捨てよ、というのか。仏教には「唯我独尊」の我、自灯明・法灯明の自。自帰依・法帰依・僧帰依の自は必要、大事なことと考える。

この点、著書の中にさらに聞きたい。もっと深く読まなければいけない、と自分の浅学を恥じ、じくじたるものがあった。

それにしても『反骨のブツダ』は出色の仏教書。仏舎利の反骨、反骨の仏舎利を得たいものである、と繰返して読んだ。この本に教えられるものは多い。

南天会会計報告(H29. 12. 1~H30. 3. 21)

(単位 円)

月	日	摘要	収入金額	支出金額	差引残高
		前期繰越			496,985
12	1	資料室書籍 JAN コード更新料※1		10,800	486,185
12	17	交流会会場使用御礼(真成院)		10,000	476,185
12	18	龍族 11 号発送代(253 通)		35,990	440,195
12	30	会費・支援金(現金)	140,000		580,195
12	30	会費・支援金(振込)	256,000		836,195
12	30	本売上(振込)	9,700		845,895
1	16	本発送		7,202	838,693
1	18	本売上	5,400		844,093
1	22	ドンガルカル・ナグプールツアー案内発送		1,685	842,408
1	26	「龍樹の遺跡の発見」南天会買取分残金※2		388,800	453,608
1	30	会費・支援金(振込)	141,000		594,608
1	30	本売上(振込)	74,422		669,030
2	1	佐々井上人薬代		9,892	659,138
2	1	佐々井上人へ支援金※3		500,000	159,138
2	1	ドンガルカル・ナグプールツアー援助※4		60,000	99,138
2	28	会費・支援金(現金)	35,000		134,138
2	28	会費・支援金(振込)	54,000		188,138
2	28	本売上(振込)	9,540		197,678
3	3	「反骨のブツダ」30 冊購入		29,400	168,278
3	3	振込手数料		216	168,062
3	4	本売上	19,820		187,882
3	16	龍族 10, 11 号印刷代		49,000	138,882
3	21	会費・支援金(振込)	135,000		273,882

※1＝佐々井秀嶺資料室は書籍販売のために出版者登録をおこなっています。

※2＝ガイクワード博士著／中村龍海訳「龍樹の遺跡の発見」(六一書房刊)出版支援として、南天会で 140 部購入しています。マンセル遺跡周知のため、佐々井上人からも要請がありました。

※3＝南天会ツアーでインド入りした事務局佐伯が佐々井上人へお渡ししました。

※4＝2月4日出発の南天会主催ツアーに同行した事務局(佐伯)の費用援助です。

(会計の詳細な資料は、事務局にて保管しております。ご不明の点等ございましたら事務局までご連絡ください。)

【特別支援金寄附者御芳名】 ※敬称略 年会費とは別に南天会に支援金をいただいた方のお名前です。

伊藤友人 漆間徳然 大橋裕 柏内敏子 菅木智子 黒澤雄太 小池一郎
 真成院密門会 鈴木美緒 土居奈生子 遠山睦子 福瀬くに子 古屋由美子
 文屋晋和 三宅初美 森下正志 森田暁
 その他、世話人賛同人各会員の皆様から様々なご支援をいただいております。

◆南天会現況 (平成三十年三月現在)

正式会員数 190名

賛同人 (五十音順・敬称略)

漆間宣隆 (浄土宗浄土院住職・前岡山県佛教会会長)
奥平心月 (約月庵庵主)

織田隆深 (高野山真言宗真成院住職・密門会会長)
小野重徳 (仏国土の会会長)

黒澤雄太 (剣士・日本武徳院師範)
小池一郎 (株式会社マクシス・シンター常務取締役)

島影透 (株式会社サンガ社長)
高山龍智 (佐々井上人お弟子)

土屋信裕 (顕本法華宗弘通所法華行者の会主宰)
富士玄峰 (臨濟宗・元ナグプール同友会世話人)

宮淵泰存 (日蓮宗妙光寺住職・長野県修法師会会長)
宮本光研 (真言宗御室派元執行)

宮本龍勝 (佐々井上人お弟子)
山本宗補 (フォトジャーナリスト)

※賛同人について

当会の主旨を理解し、協力、推薦する人を賛同人とし、お名前を公表させて頂いております。賛同頂ける方は是非お申し出ください。

※世話人について

南天会諸業務をお手伝いいただける方は皆世話人とし、特に任命等はいたしませんので、どなたでも気軽に(ご)参加ください。

●交流会のお知らせ

一時帰国中のお弟子亀井竜亀さんも参加します。その他、佐々井上人の映像観賞、6月佐々井上人来日についての報告など。
日時：4月14日(土)午後2時〜5時
場所：一心念誦堂

(岡山県倉敷市西坂1582-1)
倉敷インターから2分。駐車場10台。
電車でお出での方は倉敷駅まで迎えに参ります。佐伯 (090-5304-8955) までご連絡下さい。
参加無料、予約不要です。

●バンテジー専用車寄贈のお願い

佐々井上人やお弟子のお坊さんたちは、インド各地の改宗式や様々な行事に参加するための移動に多くは車を使用しています。その移動距離は一度に何百キロから数千キロに及び、インドの道路事情からも大変車を酷使しています。以前、日本の仏国土をつくろう会から寄贈された車の一台がいよいよ動かなくなり、10数人のバンテジー(お坊さん方)を乗せる車の数が足りない

状況となっております。佐々井上人の活動の重要な要素である車を日本から寄贈いただければと思います。

購入予定車種：TATA SUMO
価格：150万円(7.5ラックインドルピー)
フロントガラスに「ARYA NAGARJUN」、バンパーに仏旗の小旗を装着。
寄贈希望の方は、南天会事務局までご連絡を。サイド両面に寄贈者名を印字します。

●佐々井上人、6月来日!

佐々井上人には、本年も6月を中心に帰国来日されます。南天会会員・関係者の皆様には、5月中に来日期間中のスケジュール案内を送付いたします。

※現在決まっている大まかなスケジュール
5月26日 成田着
5月27日 南天会交流会
6月初旬 岡山訪問
6月15〜20日 台湾訪問
7月4日 インド帰国
日程は変更になる場合があります。

この間、佐々井上人を招請しての講演などをお考えの方は、事務局までご連絡下さい。

【会員種類と年会費】

支援会員 10,000円 (会費+支援金) / 年

一般会員 5,000円 / 年

学生会員 2,000円 / 年 (※大学生まで)

その他の特別支援も、時期・金額問わず受け付けております。



ご支援・会費について

《各種お振込先》

【金融機関名】 ゆうちょ銀行 【加入者名】 南天会

【口座番号】 0138000090164

同封の振込用紙、または郵便局備え付けの払込取扱票にてお振込下さい。なお、ご入会を希望せずご支援のみの方は、通信欄に「入会不要」とご記入下さい。

▼以前寄贈いただいたバンテジー号。



寄贈者名が入ります

南天会のご周知・宣伝にご協力ください

パンフレットなど必要な方は事務局までお知らせ下さい。PDF版は南天会ホームページ「南天会について」よりダウンロードできます。各自印刷の上ご利用下さい。

(南天会事務局)

〒710-0004

岡山県倉敷市西坂 1582-1 一心念誦堂内

TEL/FAX 086-463-9391

佐伯隆快 (090-5304-8955)

小林三旅 (090-4538-2677)

メール nantenkai@gmail.com

URL http://www.nantenkai.org/

最新情報は

Facebook 『佐々井秀嶺資料室』
をご確認ください。

